
ぼくわたっ！

由里

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ぼくわたっ！

【Nコード】

N4665S

【作者名】

由里

【あらすじ】

告白して振られた「僕」と、告白せずに振られた「私」が中心の物語。

甘酸っぱくて、こそばゆい、そんな物語になればいい。

登場人物 - 優しいけど、ちょっとへたれなシュークリームこと「柿原秋」

強気だけど、本当は誰よりも弱い女の子な「明石茜」

のほほんとした癒やし系だけど、しっかり者な「藤咲花穂」

何でもできる超人イケメンだけど、性格はアレな「白峰橙也」

——あなたは、恋愛が好きですか？
毎週日曜日の夜に更新予定です。

ブログ・彼女の場合（前書き）

稚拙な文章ではありますが、駄作、駄文というつもりはありません。更新不定期ですが、のんびりと楽しんでいただけたら嬉しいです。感想、批評どんどんお願いしますね。

ブログ・彼女の場合

「なあ、青葉さんと付き合うためにはどうしたらいいかな？」

そんな電話がかかってきたのは、6月1日、深夜2時25分だった。こんな時間にかかってきたのに、呼び出し音が三秒鳴っただけで出た私を誰か誉めて欲しい。

「ねえ、今何時かわかってるの？ 私すっっごく眠たいんだけど」

私は苛立ちを隠すことなく白峰に告げる。ああ、また――寝不足か。

「ごめん。でも、今聞きたくてさ。思い立った今聞かないと、ずっと聞けないような気がして……」

「はあ……。それで白峰に付き合わされる私は何なの？ あんたの下僕？」

いつもそうだ。白峰は私の都合などお構いなしに、電話をかけてくる。しかも、決まって私が疲れている日にだ。今日だって剣道の大会が近いからと、居残り稽古をしてたっていうのに。

「ちっ違っって！ 明石は大切な幼なじみだよ。明石にしかこんなこと相談できないんだ」

「うっさい。あんたの図体と同じでっかい声出さないで。で、付き合いたいのか？ あんたじゃ無理無理」

大切な『幼なじみ』ならば、相手の状況を知らないで、知ろうともしないで何をしてもいいのだろうか？

私は電話を早く切りたいがために唐竹割りな答えを返した。

「……何でさ？」

その不満気な口調には自分に自信があり、無理なはずがないという声が隠れていった。

「自分でわからないの？ 私の都合を気にすることさえできないあんたが、付き合うことなんてできるわけないって言ってるのよ。さつきも言っただけど、私は眠い、さっさと切りたいの」

突き放すように私は言う。空気の読めない白峰には、曖昧に通じるわけがない。ああ、ウザイ。私はなんで……

「じゃあ、青葉さんは何が好きかだけを教えて」

人の話を聞いているのだろうか。いや、聞く気がないのだろう。白峰は自分中心に世界が動いていると思ってるんじゃないヤツだ。事実、白峰は神様に愛されているかのように全てが上手くいっている。

「べったべたに甘い恋愛小説または万葉古今新古今の恋の和歌」

私はそれだけ言って通話を終了させる。本当は嘘を言いたかったけど、それをするのは反則な気がした。

ストレスを発散するために星空でも見ようとして窓を開ける。だけど、月は星は一つも見えず真っ暗闇だった。

- - なんて、無様。

もやもやとした厭なものは溜まるばかりで、少しも発散することはできなかった。

- - - - -

「青葉さんは大伴坂上郎女が好きなんだ。確か - 思へども駿もなしと知るものを如何でここだく吾が恋ひ渡る。だっけ？」

オオトモノサカノウエノイラスト

「そうっ！ 私が好きなのはまさにそれなの。白峰くんも和歌が好きなの？」

「そうだよ。最近好きになったんだ。郎女だと他には恋ひ恋ひても人気だよね」

次の日。なんと白峰は朝っぱらから葵を口説いていた。いや、予想はできていた、三途の川を渡ればいいと思う。

「茜、初めて和歌に興味のある男の人に出会ったよ」

「へー、良かったじゃん葵。まあ、白峰だったのが気に食わないけどさ」

ああ、面白くない。全くもって面白くない。白峰、あんたの最近には昨日も含まれるのか？ 白々しいったらありやしない。

あんたがあの後すぐ、ネットで有名な和歌を調べて、暗記してきたことはわかってるよ。それに郎女は恋の和歌の代表格だということも調べたんだろ？

葵も初めて理想に出会ったからと言って喜び過ぎだ。しかし、その跳ねる姿は子猫が頑張つて段差に向かって跳ぶように愛らしい。そして、それがまた憎たらしいほど葵の容姿と似合っているのだから、私には何も言うことはできない。まあ、葵の魅力と言ってしまえばそれまでのことなのだけれど。

「じゃあさ、今度三人でどっか遊びに行かない？」

「まったく、手が早い。しかも、セコい。二人だけじゃなくあたしを含めた三人だと言うことによって、葵が断りにくくなっている。

「茜ちゃんもいるならいいけど。いつにするの？」

ほら、やっぱり葵は断らなかった。ここであたしが剣道の大会が近いからと断わっても、どうせその次の週の休日を提案するのだから。

「今週の日曜日、いや、来週の土日のどっちかがいいかなあ。今週の土曜日明石の大会があるからね。迷惑を掛けちゃいけない」

わかりやすいんだよ。白峰の考え方なんて。そんなことよりも、迷惑なんて言葉を白峰が知っていたことに驚いた。傲慢で人の都合なんか考えたことないこいつの頭だけには、その言葉は存在しないと思っていた。

「そっか、じゃあ来週だね。茜ちゃんもそれで大丈夫？」

「まあ、私は」

「それじゃ、青葉さんのメアド教えてくれない？ 時間とかの連絡

に使いたいんだよね」

嘔吐け。本当は口説くためだろうが。連絡とか適当な内容で不自然さを消しているだけだ。連絡だけなら私を経由すればいいのにね。

「いいよ」

葵はそう言つて、桜色のシンプルな携帯を右ポケットから取り出し、赤外線機能を使って白峰とアドレス交換した。多分、プロフィールを送つただろうから、メアドだけではなく、生年月日、住所、血液型、電話番号まで教えたことになる。

「ありがと、おっと、そろそろホームルームが始まるから、また後で」

「うん、後でねっ」

そうして私たちは各自の席についた。

もちろん、今日の私はそれからの授業に苛ついて全く集中できなかったのは言うまでもないこと。

- - - - -

「面ツ - - !」

「面有りッ。勝負有り」

旗が上がり、私の勝ちが決まった。鰐迫り合いからの引き小手と面の二本勝ち。

「お疲れ、茜。もう次は決勝だね」

「ありがと、花穂」

6月4日、土曜日。私は大会に出ていた。大会と言っても地区大会でそんなに大きいものではない。

「また優勝して県大会、そして関東大会に行くのかな？」

「もー、花穂ったらプレッシャーかけないでよ。私がそれに弱いのは知ってるでしょ？」

「茜だったら大丈夫だって！それに、今日はいつもより気合いが入ってるし、打突も速いよ」

花穂は自分のことではないのに、自信を持ってそう言ってくれた。

「ありがと」

でも、ごめんね、花穂。気合いが入ってるんじゃない、ただの八つ当たりで暴れてるだけなんだ。さっきの試合も一本目を取り、相手が自分よりも弱いつてわかった確信した途端に、私は相手を虐めるような剣道をしていた。

わざと大きな隙を作り、それを狙ってくる相手を嘲笑うかのよう。に後の先で刺し面。そこに駆け引きなんてない。実力差があるからこそできる卑怯な行為。正直、後の先をとらずとも、一本目と同様、普通にしていれば良かったのだ。

「うちの剣道部で強いのは茜だけなんだからね。男子なんか全員一回戦負けだよ」

「ふふ、花穂だって一回戦負けじゃない」

「あつひどい。それは言わない約束でしょー!」

花穂は高校から剣道を始めた。高校から始める人は珍しく、周りが経験者ばかりの中、初心者がつた一年練習しただけで勝てるほど簡単なものじゃない。

だけど、花穂はへこたれることはない。負けたら何が悪いかを反省し、それが直せるまでひたすら練習する。踏まれても踏まれてもまた太陽に向かって真っ直ぐに育つ。その姿はまさに野に咲く花。その輝きは薔薇よりも美しい雑草。

剣道は簡単じゃないとは言ったが、多分、いや必ず花穂は今年中に私から一本を取れるようになるだろう。来年には負けてしまう。もちろん、すぐに負ける気はないのだけれど。

「まあ、また練習に付き合うから、許してよ」

「そう？　ありがと、許してあげる！　じゃあ、来週の日曜日に付き合ってくれる？」

来週の日曜日……か。丁度いいな。

「もちろん、2時くらいになったら練習するってメール送って」

「うんっ。って茜、呼ばれてるよ！　早く行かなきゃ!」

「わかった、行ってくる」

ごめんね。また八つ当たりしてくるよ。

「始めッ!」

主審の合図で蹲踞ソンキョから立ち上がり、中段に構える。相手の目を見て、気迫でまず勝つ。

相手は竹刀を軽く動かし、私の構えをずらし隙を作ろうとする。さっきの試合を見ていたのだろうか、私がわざと作る隙には乗らず、自分で作ろうとしていた。

だけど――ね、

「面ッ――!」

「面有りッ!」

相手が私の竹刀を払う瞬間に、相手の動きに合わせ竹刀を払い、隙のできた面に打ち込む。吸い込まれるように入ったそれは、私の黒い感情を破裂させたような不気味な音を響かせた。

醜い八つ当たりなんかしてごめんなさい。真面目に剣道をしているあなたの誇りを踏みにじってごめんなさい。

でも、今からは八つ当たりなんかせず、私の試合をするから、あなたと同じように真面目にするから、どうか――許して。

「二本目ッ!」

さっきの一本で相手は警戒し、無闇に私の隙を誘うことなく、堅

実で堅牢な構えをとる。地区大会とはいえ一応決勝戦だ。そんなに弱い人が出てくるわけがない。

相手が打ってこないのであれば、後の先を狙うことは当然不可能だ。私が私の隙を作っても無駄だとわかってるし。
ならば――先をとる。

「小手ツ面ツ――！」

連続で打つが入らないし、そもそも入れる気もなかった。錨迫り合いにするためにしたのだ。

顔をよく確かめたかった。決勝で私と戦う人はどんな人なのかと私が勝ったとしても、負けたとしても相手の顔さえ知らないというのは何かやるせない。私は今まで試合をしてきた人、全ての顔と声、構えや打ち方を覚えている。

できることならば私は試合の後に、私と戦った全ての人と話してみたかった。だけど、勝った人は次を見据え、負けた人は悔しさから相手にしてくれることは少ない。

だから、私は、一方的に相手を覚える。それが私にとって相手に敬意を表す礼儀であり、私のルールだから。

相手の呼吸は深く、落ち着いていたものだった。いや、無理やり落ち着かせているのか。彼女の顔には朝の日に照らされ光り、葉から流れ落ちる露のような汗があった。そして、私は試合中だということにそれに見惚れてしまう。
不意に彼女は息を止めた。

「面ツ――！」

相手が私が息を吸う瞬間に引き面を放つ。真っ直ぐで型通りの打

突、それは渾身の太刀と言ってもよい。しかし、それが私の面を捉えることはなかった。咄嗟の反応で僅かに避けられたそれは、私の右肩にあたる。

右肩にズキリと鈍い痛みが走る。しかし、私はそれを気にすることはない。

引き面を打ち下がった相手を追う。一足一刀の間合いまで迫ると、息を小さく吸い、力を溜め、機を狙う。

- - まだ、相手の体は崩れていない。

- - まだ、相手は私を見ている。

- - 今、瞬きを、

「突きイツ - - ！！」

左足に力を入れ、体を崩さず、しかし身を捨てるように飛び出し、突く。喉を貫通させるつもりで放った乾坤一擲ケンコンイチテキの刺突。相手の喉当てを正確に捉えたそれは勢いを殺すこともなく、面を床に落とし、彼女を転ばせた。

「突き有り、勝負有りッ！」

『ありがとございましたッ！』

互いに礼をして試合が終わった。

相手に話しかけようとしたが、彼女は声をあげて泣いていた。宝石のように煌めく涙は止まることなく流れ、絶えることなく落ち、床に夢くはじける。

そんな姿を見ると話しに行くことなどできるわけがなかった。

もし話しかけるとして、私は彼女に何と云えばいいのか？ あな

たは強かったという惨めな慰め？ こうすれば良くなるよという傲慢な意見？

やはり、私は話しかけられるわけないのだ。一方的に彼女を覚えるだけ。

「お疲れっ！ 優勝おめでとう」

花穂はいつの間にか私の後ろにいて、私を誉めながら面を外してくれた。

「最後の突き凄かったね」。私、相手の面を落とす突きなんて初めて見たよ」

「ありがとう」

彼女は私の暗い気持ちなど知らない。知って欲しくない。花穂は誰よりも明るく、子供よりも純粋だ。私の中にある醜い汚泥を知ってしまったら、きっと私は嫌われてしまう。最近の私は花穂だけを支えとしているのに、それを失ってしまったらきっと電池が切れた時計のように無意味になってしまう。動くからこそ必要であるのに、動かなければただの置物だ。

「あゝ、私も茜みたいな突きができるようになりたいな」

「日曜日に教えてあげるって。まあ、その前に構えをちょっと直さなきゃね」

「えっ、また私の構えおかしくなっちゃった!？」

私の竹刀を取り、真面目な表情で中段に構える花穂。その仕草が

小動物のように可愛くて思わず微笑んでしまいそうになった。

「普通より肩が上がってるよ。ってもうすぐ閉会式だよ。続きは日曜日だね」

「うんっ、お願い」

それから私たちは閉会式に出て、私は優勝の賞状と県大会への切符、副賞に竹刀と手ぬぐいを貰った。

- - -

「茜ちゃん、待った？」

「ううん、待ってないよ」

大会から一週間後の6月12日、日曜日。私と葵は駅前で待ち合わせをしていた。白峰の計画によれば、映画を見て、ファミレスで昼食をとり、午後はウィンドウショッピングやゲーセンに行くらしい。

「で、白峰の阿呆がいない。無視して行く？」

「えゝ、せっかく白峰くんが誘ってくれたんだから一緒に行こうよ」

「わかったわかった、白峰も待つよ」

ここ二週間で、葵と白峰の仲はかなり良くなった。葵の趣味に合わせ、和歌を暗記し、恋愛小説を大量に読んだ白峰はかなり女心（

葵限定の）をわかるようになっていた。変なことに努力をする男である。そのやり方で高校でも剣道を続けていたらかなり強くなっていたはずだ。それで私を相手に試合したら、肩についた塵芥を払うような感覚だろう。

一方、葵はそんな白峰を気にするようになっていた。元々、白峰の容姿は悪くない。むしろ、幼なじみという間柄を抜いても良い部類に入るだろう。そんなやつから自分に合う会話や優しさをかけられたのだ、嬉しくないはずがない。

事実、葵は私にメールで白峰の好みを聞くようになっていたり、教室でもよく話すようになっていた。つい三日前には長電話もしたらしい。

- - 最近、葵と話すのが疲れてくるような気がする。

「お待たせ。やっぱり女の子って時間よりも早く来るんだね」

「女の子って言うより、楽しみなことには早く来ちゃうだけだって」

そんなことを言いつつ、私より遅く来たのは誰だったっけな？

「葵さんは可愛いね。ま、どうせ茜は違う理由だろ？」

名前で呼ぶようになっていたのは知らなかった。葵の顔を見れば、頬を桃色に染めていた。ああ、そうか、今初めて名前で呼ばれたのか。

「うっさい。私は習慣だよ。どうでもいいでしょそんなこと。で、集まったんなら映画行かないの？」

「ごめんごめん、じゃあ行こっか」

全く、どうして最初から私は苛つかなければならないのだろうか？　そもそも、私がここにいなければ、葵だっていない、つまり、白峰と葵にとつてのデートが成立しないのだ。いや、既に仲の良くなった二人からすれば私は邪魔者か？

しかし、そのきっかけを作ったのが私であることも事実だ。白峰から感謝はされてもさっきのような発言はないだろう。

- - ああ、また厭な感情が溜まる。

「ねえ、何を見るの？」

「お楽しみだよ」

その言葉通り、私と葵はこれから何を観るか知らなかった。いや、私にはわかっていた。きつと、いや絶対に源氏物語の一部を映画化したやつだろう。いかにも葵が好きそうなやつだ。

私たちは映画館に移動し、白峰がチケットを三枚買った。高校生友情プライスで少しだけ安くなったという。

「さてと、もうすぐ上映だから入ろう」

「うんっ」

白峰と葵が先に歩き、私が少し後ろを歩く。自然となった結果だ。それは二人だけで楽しんでいるということと、私自身があの二人について行きたくないということだ。さつさと上映しろ。せめて映画に集中してストレスを癒やしたいんだ。

- - が、私のこの思いは全く無視された。

そう、私たちが観ているのは予測通り「源氏物語」だ。光源氏は

容姿が良く、和歌も上手いということで、とつかえひつかえ色んな女性と付き合うあの「源氏物語」だ。普通の、一人対一人の恋愛が当然であると思う私に、ある個人が複数の人と付き合う「源氏物語」は合うわけがなかった。

光源氏は「誠実」な人であつたと古典の授業で教わつたが、その「誠実」があれか？ ふざけてるのはおめでたい頭の中だけにしろ。確かに、昔と今とでは文化が違うことはちゃんとわかっている。しかし、それでも私には嫌悪感しか浮かばないのだ。

- - ああ、全て、うざいな。

早く始まれと思つていた気持ちは、一秒でも早く終われと思うようになっていた。どうせ、終わったとしても楽しくはないのに……

「終わったね、スツゴく面白かった。最後なんて切なくて泣きそうだったよ」

「あれ、俺がふと見たときは本当に泣いてなかったつけ？」

「えっ、見てたのっ！？ …… あっ茜はどう思つた？」

久々に私の存在が思い出されたようだ。まあ、こんな誤魔化しのために思い出されるのならば、いつそ忘れ去られている方がずっと良いが。

「えーと、ごめん。私にはちょっと合わなかったよ。時代が違うつてのはわかってるんだけどね……」

ここで変に賛同したらずるずると引きずり込まれてしまう。だから、空気を悪くしてでもそれは避けたかった。

「そうだね。色んな女の人と付き合うのストーリーが合わない人もいるよね」

「へへ。明石はそんなこと思ってたんだ」

ああ、そうだけど、悪いかな？
私だって一応、女性だ。

「まあ、流石に現代にあんな人がいたらおかしいと思うけどね」

「そうかあ？ 外国にはまだ一夫多妻制があるじゃんか。まあ、俺は違うけど、大体の男はたくさんの人と付き合いたいって欲望があるな」

それは、自分は違うと前置きすることで「俺は他人とは違って誠実だ」とアピールしているのか。「自分は一途でお前だけを想うぜ」とでも言っているつもりか。

- - 死ねばいい。

「ハーレムを目指すのは妄想だけにしろっての。不細工なのはせめて顔だけにしろっての。中まで駄目ならそれこそ最悪」

私の悪辣な発言に温度が下がったような気がするが、知ったことか。私は苛ついている、あんたらのせいだ。これくらい私と比べたらどうでもいいだろ？

「そっそれじゃあ、昼食を食べよう」

「そっそうだね。行こっ茜」

それから近くのファミレスで昼食を食べた。白峰と青葉は違うハンバーグセットを、私は野菜のサラダとコーンスープだけにした。沢山食べるとこの後吐くことになるだろうから。

食事中はやはり白峰と青葉が常に会話していた。映画の感想だったり、音楽だったり、楽しそうだった。最初は私にも振られるのだが、適当に返していることがわかった、だんだん少なくなっていた。

まあ、私のことを気にするよりも、二人だけの世界に入り浸っている方がいい。その方が私も楽だから。

「ごめん。来週県大会で、今日も練習入っちゃった」

だから、こう言いながら、花穂からのメールを見せれば、脱け出すことなんてとても簡単だった。

- - もう、見ていらなかった。

- - - - -

「花穂、ありがとう」

「んー、いきなりどうしたの？ 私が感謝する方で、茜が言うことないって」

私と花穂は学校の武道場で準備運動をしていた。休日は開いてい

ないのだが、あらかじめ花穂が先生に言って許可を取り、鍵を借りていたようだ。

「さっきまでストレス溜まりまくりでさ、一秒でも早く花穂に会いたかったよ」

「んっ、それ、後半の台詞だけ聞くと百合百合だねっ！」

「ああ、やっぱり、花穂はいいな。」

「いいよ、花穂相手なら百合になっても。むしろもうになってるかも」

私は冗談七割、三割くらいは本気だった。

「あら、茜が冗談を言うなんて相当ストレス溜まってたんだね」

花穂は天使のように笑いながら私の頭を撫でる。私の身長は150センチにさえ届いていない。170センチを超え175センチに届こうとしている花穂から見れば私はきつと子供サイズなんだろう。子供扱いをされたり、むやみやたらと触られるのを嫌う私だが、花穂から触られるのだけは別だった。心地良く、そのままずっと体を預けてしまいたくなる。

ふにやり、ほにやりとお腹を見せ甘える猫の気分だ。

「花穂は癒やし、私の中にある厭なものを優しく吹き払ってくれる一陣の風。」

「さっ、のんびりタイムはおしまいっ。真面目に剣道を教えてくさい！」

「わかった。じゃあ、まずは構えて」

名残惜しいけれど、ここにいる理由は私のストレス発散もあるが、そもそも花穂に教えるためなのだ。私は気持ちを切り替え、真面目に教えることにする。

花穂の構えの癖を直してから、切り返し、打ち込みの練習を30分くらい。小休憩の後の地稽古（試合形式だが何本取っても勝敗は決めないもの）をしていた。

「相手の目と一緒に全身にも注意して！ 相手が息を吐く瞬間、瞬きをする瞬間も見逃さないの！」

「はいッ！」

休憩中とかは遊んでいても、こうして稽古をしている時は本気でする。当たり前のことだけど、それが一番の上達の方法。

「構えを弛めないッ！」

花穂の腕が少し下がった瞬間に突きを放つ。外れた時のことを考えれば、普段は面を狙うのがいいのだが、花穂との身長差のせいで届き辛いのだ。

相手との身長差を補うための突き。私が突きを練習し得意になるまでになったのは、ただそれだけの理由だった。

「つつかれた〜！ いい汗かいたね〜」

「そうだね。ねえ花穂、今度上段試してみない？」

地稽古を1時間くらいすると、二人ともバテバテで、防具を外し、だらしなく床に寝転がっていた。

首を軽く曲げ顔を合わせ会話をする。

「ふえ？」

目を丸くしている花穂もいいなあ……

「花穂は私と違って身長高くて、手も長い。力だつてあるから、上段だとかかなり有利だと思う。突きはできないけど、花穂にはそっちの方が合うよ」

「そっかあ……。……うんっ、茜が言うならそうなんだね。茜には茜の私には私のやり方があるそう。じゃあどうすればいいの？」

「ごめん、提案しておいて悪いけど、私は上段やったことないから、先生に聞いて」

小さい私が上段を使つても逆に隙だらけになるだけだ。私にとってはデメリットばかりから試す気もなかった。

だけど、花穂には合うはず。

「ん、おっけ。上段で茜から一本取つてやるんだからねっ！」

「ふふ、楽しみにしてる。まあ、すぐに負けるつもりは更々ないけど」

誰かの成長を見るのはとても楽しい。それが花穂のことなら尚更だ。子供がいつか親を越える、そんな瞬間を私は見たい。まあ、私も子供だけだ。

「ありがと。それじゃ、今日の練習はこれくらいにしようか。明日の部活に響いたらいけないしね。」

それから私たちは武道場の雑巾がけ、防具の陰干しをしてから帰ることにした。

- - - - -

いつの間にかに、私の中にある黒いもやは消えていた。

寝る前に白峰と青葉からメールが届くまでは。

『葵と付き合うことになった。そうそう、今日の映画のチケット代は明日渡してくれればいいや』

やっぱり感謝の一言さえないか。所詮私は都合よく使われるだけの便利な「幼なじみ」ってわけね。

- - わかってたよ、そんなこと。

『茜ちゃん、私ね、白峰ちゃんと付き合うことにしたよっ！ ある意味茜ちゃんのおかげだね。ありがとっ』

そのメールに私は返信することはなかった。ただ一言、おめでとうと返せばいいのだが、それさえすることができなかった。

予想はできていた。覚悟もできていた。

それなのに、どうして、どうして泣きたくなくなっているんだろうか？

うざい奴がこれで収まるじゃないか。

うるさいのがこれでマシになるじゃないか。

ほら、喜ぶことでしょ？

喜ばうよ、喜ばう……喜べよ。

・ ・ ああ、どうでもいいか。

もう寝よう。そう思って眠ろうとするが、目は覚めていて、嫌なことばかりを考えてしまい、全く寝れそうにはなかった。

・ ・ ああ、結局こうなるのか。

・ ・ なんて、無様。

目からとめどなく溢れる雫は枕を濡らし始めていた。

ブローグ・僕の場合

4月7日、木曜日。

風に揺られ、桜は舞っていた。

「気付いてるかもしれないけどさ、明石のこと好きだ」

入学式や卒業式じゃなく、始業式の日には告白したのは、ただ我慢ができなくなっただけから。

去年の入学式の際は振り向いてもらえないってわかっていたし、卒業式だと付き合えたとしてもすぐに遠距離恋愛になるから。

本当は何よりも、残り二年間も言わずにいることができないから。

だから――始業式の今日、告白することにした。

「ううん、知らなかった」

彼女はそう言って少し俯いた。表情を見ることはできなかったが、その仕草だけで、答えが、わかって、しまった。

ああ、ダメだったか……

「そっか、明石は白峰のこと好きだから、そこに僕が入るのはお門違いってもんだよね」

当然、落ち込むけれど、立ち直れないほどではない。何故なら、予想はできていた、片思いだって最初からわかっていたから。そう、これは自己満足。叶わなくとも、自分の想いだけでも知っていて欲しいという、相手のことを考えていない身勝手なもの。

「……ごめんね」

「最初からわかってたから。謝んなくていいって。ただ……」

一呼吸、喉から声を絞り出す。

「ただ――好きでいていいかな？　もちろん、明石が迷惑じゃなかったらだけど」

こんなことを言つて、気持ち悪いと嫌われないだろうか？　僕が吐いたのは、惨めで臭い台詞、でも、それに込めた想いは本当で。

「……うん、いいよ」

そう言つて彼女は小さく微笑んだ。その笑みだけで満たされてしまふ僕は小さな奴なんだろう。

でも、それでいいと思つてしまふ自分がいることも確かだ。

――明石は知らないだろう、僕は良く言えば一途で、悪く言えば諦めの悪い奴だつてことを。まだ、今年で五年目だ。

好きな人の好きな人が幼なじみだという大きな壁。僕なんかに乗り越えることができるかはわからない。けれど、乗り越えないと先はない。

「ありがと。さつてとっ！ 今日もこれから部活だなあ。いつも通り明石にボロボロにされるよ」

今の自分にできる最大限の明るさで明石に笑いかける。多分、彼女は気づいていると思う、ただの強がりだっていうことくらい。

「私は別に、ボロボロにしたい訳じゃないんだけどね……」

それでも明石は気づいていないように振る舞ってくれる。会話をしてくれる。

告白の後でも、すぐに軽口が言い合える仲。それが今の自分と彼女の関係だ。

きっと友達以上で恋人未満な微妙な仲。先に進みたいと望むのは悪いことなのだろうか？

「わかってる、僕が弱いだけ。一応、部長なのに情けないことこの上ないや」

こればかりは言い訳ができない。いや、こうは言えるか――僕が弱いのは認める、しかし、明石は強すぎるって。

- - 無様だな。

「はあ、別に実力があるからって部長に選ばれたわけじゃないですよ。まあ、こんなこと言っても本人にはわからないか。じゃあまた後で」

時計を見たら、もうすぐホームルームの始まるだった。

「ああ、わかんないね。あ、今日は新入生勧誘の打ち合わせをするから、早めに稽古は切り上げるって女子に回しといて」

「ん」

そうして、俺たちはそれぞれの教室に戻り始めることにした。

――桜は相も変わらず、白雪のように散っていた。

プロローグ・僕の場合（後書き）

これでプロローグはおしまいです。
感想、批評など気軽にお願ひしますね。

4月7日・彼女の場合

小説本文

シュークリームに告白された。

- - いや、シュークリームと言ってもちゃんとした人間だ。
柿原秋。カキハラ シユウ私の所属している剣道部の部長である。

私は教室で、ついちょっと前の出来事を思い出していた。

告白が嬉しくないわけではない。好きか嫌いかの二択ならば、好きと答えると思う。だけど、付き合っただけで欲しいと言われたら、返事することはできなかった。

だから、俯いてしまったのだ。秋はそれだけで答えを察してくれた。

秋の言うとおり、私は白峰のことが、多分、きっと、好きなんだろう。曖昧であるのは私自身確信を持って言えないから。

「ただ - - 好きでいていいかな？ もちろん、明石が迷惑じゃなかったらだけど」

そんなことを言われたら、頷くしかないじゃないか。だって、秋は今すぐ泣きそうな顔をしている。捨てられた子犬、または親を亡くした小動物を思わせる。

それから、秋はおどけて私にボロボロにされると言った。それは

強がりだ。笑ってるけど、泣いている。

私は強がり気づかない振りをして、普通に会話する。

秋は自分には部長など似合わないと言うが、私はむしろ秋以外の誰が部長をやれるのかと思っている。

三年生がいない剣道部で、今活動しているのは私たち二年生だけだ。一年生はこれから入部してくることを期待したい。

しかし、部員は男子三人、女子三人とかなり少ない。ギリギリ団体戦に出られる人数である。

その中で秋は人をまとめることに一番長けている。シュークリームとゆるゝいあだ名がつけられているが、しっかりする時はちゃんとする人物だ。

強いから部長になるのではない。みんなのことを考えられるから部長に相応しい。ただ、秋はそう思っていないらしく。部長になるからには実力が伴っていないならならないと考えている。

まあ、本人が気付いていないならそれでもいいと私は思う。自身の実力が伴っていないことが不満なら、稽古し実力をつけようと努力するであろうから。きつと、いや絶対に秋ならそうする。

「茜、額にしわ寄っちゃってるよ？ 何か嫌なことでもあったの？」

「嫌なことじゃないんだけどさ……」

「じゃあ何なのさあ？ 言っちゃいなよ、言っちゃいな」

突然花穂に話かけられて私は少し驚いた。

そして、花穂に言うべきか言わぬべきかを考える。特に秋から口止めされたわけではない。しかし、言うのはなんとなく駄目なような気がする。

「ふふ、言いたくないんだなっ!?　じゃあ私が当てちゃっていいかな?」

にやあり、意地の悪い猫が笑う。

「シュークリームに――告白されたでしょ」

私だけに聞こえる声で、とんでもないことを囁きやがりました。

「……ふえ?」

――なんで?

時間が止まる。頭が痛くなる。

「当たり前かにや?　当たり前だねっ!」

花穂はからからと笑う。そんなことお見通しだよこのヤロウみたいな表情だ。私はヤロウじゃないよこんちくしょう。

私は変なことしか考えられない。混乱、メダパニ、こんらん、コンフュ。

「なぐんてねっ。秋くんからメールで『明石さんの額にしわが寄ってたら存分に弄ってあげて』って教わったんだ。まあ、告白云々は前からそーだんされてただけ」

「……あのバカ、本当はボロボロにされたいんだね。いいじゃない、本気でやってやるうじゃないの。突いて突いて突きまくってやる。喉が腫れるまでやってやる」

ふふふ、あはは。黒い感情が溢れる。今の私はいい笑顔だ。

「女の子が突いてって言うと、なんか、こつ……アレだねっ、えっちい」

「えっちい言っなッ!」

恥ずかしいことに、私にはああいうのに耐性が全くない。

「茜つたら、部活の時でも男子の着替えを見られないもんね」

「大体あれは、あいつらが人の前でも普通に着替えてるのが悪いッ!」

そう! あれは男子が悪い! いくら男子の更衣室がないからって、女子がいるのに部室で着替えるのがいけないのだ。

「純情なんだから。今時珍しいよ茜みたいな子は。高校生にもなつて男子の上半身が見られないなんて」

なにこの公開処刑。教室中からなんか生ぬるい視線が突き刺さるんだけど。ちよつと竹内さんまでこつち見ないでよ。あなただって私と同じくらい苦手じゃない。

「……あ、そうそう。今日の部活はね、新入生勧誘の打ち合わせをするから、早めに稽古は終わるってさ。吉野に伝えといて」

「もう、あからさまに話変えた。まあ、いつか。それで……落ち着いた?」

ふっと、意地の悪い猫の表情は変わり、花穂の表情は心配するよ
うなものになった。

――そっか、全部わざとやっていたんだ。

秋から告白されて悶々していた私にいつもの調子を戻させるため、
からかっていたのか。秋のメールで花穂は全てを察したのね。

「ありがとう。大好き」

「ん、それ、百合百合だねっ！」

さあ、部活に行つて、柿原秋を倒そう。

4月7日・彼女の場合（後書き）

植物の名前を使った苗字が浮かんだ方は、感想版にて教えてください。

よろしくお願いします。

例・柿原・吉野・竹内

4月7日・僕の場合

「今日は新入生勧誘についての話し合いするから、練習は早めに切り上げるよ」

ホームルームが終わり、僕は染井くんに話しかけていた。彼はスラリと高い身長に短めな髪、そして、同じ男の僕から見ても羨ましいくらいに整った顔をしている。

「わかった。って柿原、浮かない顔してどうした？」

浮かない顔の理由は二つである。

彼が心配してくれたら、少し夢見がちな女の子だったときめいてしまうのではないだろうか。

……自分の平凡な全てに悲しくなる。

「いや、何でもないさ。大丈夫、いつも通りだよ」

「……そうか。ならいい。吉野には明石が伝えてるのか？」

多分何があつたのかは察してくれたと思う。もちろん、僕が羨んでいることには気づいていない。

吉野さんと染井くんは付き合っているのだ。倦怠期知らずのカップルとはまさにこの二人を指す。

「そつだよ。吉野さんは明石と同じクラスだしね。あ、笹木くに伝えといてね」

「ああ、また後で」

「うん、一時間後にね」

- - - - -

胴着と袴に着替え、僕は武道場にいる。まだ部活まで余裕はある。なのに何故ここにいるかと言えば、掃除するためだ。

昨日までは春休みで、最後の三日間は部活がなかったのだ。別に面倒だから部活がなかったわけじゃない。ただ顧問の先生の都合が合わなかっただけ。

そんなわけで、三日間掃除されなかった武道場の床には当然、うつすらと埃が積もっている。

剣道は裸足です。つまり、埃のある床でやると、滑ってしまうのだ。人数の少ない剣道部で、誰か一人でも怪我したら、団体戦に出ることができなくなってしまう。まあ、大会に出るためだけに掃除をするのではないんだけど。

言うまでもなく、もやもやした気持ちを静めたいからだ。

「さてと、やるか……」

自分以外誰もいない。

自分の吐息意外何も聞こえない。

腕捲りしてから、バケツに水を汲み、新しい雑巾を浸し、思いっ切り絞る。

水が全く落ちなくなったら、雑巾がけの始まりだ。

只管、拭く。
ひたすら

- - - -

気づいたころには、拭き終わっていた。雑巾は両面とも真っ黒になっっている。

「ふう……、こんな感じかな」

「お疲れさまあ」

後ろからほわほわとした甘い声。

「……藤咲さん、どうしたの」

振り返らずにそう聞いた。

「落ち込んで、隅っこで膝を抱えてないか見に来たんだ。あ、大丈夫、茜ちゃんはまだ着替え始めたばかりだよ」

にやはは、と藤咲さんは悪戯好きな猫みたいな顔をしている。本当は何を思っているのかが全くわからない。ただのからかいかもしれないし、心配かもしれない。

「そこまで酷くないよ、大丈夫、僕は――」

「すとうつぶ。振り返らなくても、秋くんが酷い表情だってくらい知ってるよ」

ほら、ちょうだい。と、そう囁いて、僕の顔を見ないまま、僕の右手から雑巾を抜きとる。

その時一瞬だけ触れた彼女の手は、水に濡れた僕のそれよりも温かくて柔らかかった。

――どうやら、心配のようだ。

「うわっ！ 真っ黒だあ。やっぱり三日も掃除しないところなるんだね」

藤咲さんは笑い声をあげながら僕に背を向け、雑巾を洗っている。僕の顔を見ないようにといい配慮なのだろう。

雑巾を洗う音はバシャバシャと豪快だけど、バケツから水は全く飛び散ってはいなかった。

雑巾を取られた僕は何もすることがなく、キレイになった床に座った。彼女に顔を向けることができない。

僕は彼女の後ろ姿に、

「ありがとう」

本心からの感謝だ。相手の目を見て言うのが一番なのはわかっていた。

それでも僕には彼女を見ることなんかできなくて。情けないけど、それが今の僕なんだ。

「ふえ？ 私はただ、しょぼくれてる秋くんを見て笑ってるだけだよ？ だから、感謝されるコトなんてないよ」

にやははくと、やっぱり彼女も僕に顔を見せないまま答えを返す。

「僕が勝手に感謝してるだけ。だから、藤咲さんは適当に受け取ってくれればいいんだよ」

「はいはーい。じゃあ、感謝されとくねー。そろそろ茜ちゃんやみんなも来ちゃうよ。顔洗ってきなさいっ！」

「ん、わかったよ」

僕は素直に従い、シャワー室の洗面台で顔を洗うために立ち上がる。

「それでいいのです、それがいいのですよ」

彼女の同じことを二度言う変な癖。それが何でか僕の心を落ち着かせた。

結局、武道場から出るまで、僕は彼女と一度も顔を合わせなかった。

「ありがとう」

彼女に聞こえないように僕は呟いた。

幕間 - 誰かの場合？

いつからだろうか。

私が彼から目を離せなくなってしまったのは。

こんなことを言うと夢見がちな女の子と思われるが、私にとっては、出逢いからして、運命的だった。

きっかけまで全て語ると長いので、今日は彼との出逢いだけを語ることにしよう。

- - -

一年前、2月15日、月曜日。

私立橋東高校の入学試験日だった。

その日は朝から雨が降っていた。土砂降りまではいかないまでも、かなり強く降っていたことを鮮明に覚えている。

私は雨が嫌いだった。濡れてしまうと、髪の毛はぐちゃぐちゃになっちゃってしまうし、早く処理しないと風邪を引いてしまう。

- - そして、雨の日の体育は必ずと言っていいくらいバスケットボールかバレーボールだったから

そんなわけで、試験会場に着いてからも、なんとなく憂鬱だった。

公立高校も受ける予定ではあるが、それは確実に合格できるように、模試の偏差値からいくつか引いた学校だ。

私の第一志望はこの私立橘東高校なのである。

理由は単純明快で、自宅から近いのと、偏差値が結構高く、私の通っていた中学の生徒だと目標にさえしない（できない）場所だからだ。

- 私「友人」が誰もいない場所に行きたかったのだ。
その理由をいつか話せたらいいと思っている。

――――

試験が始まる。英語、国語、数学、グループ面接の順番だった。進学校だけあって、どの科目も難しかった。しかし、落ちた気はしない。私はこの日の為だけに、勉強してきたのだ。

面接だって頑張った。笑顔で面接官に接する。私はこんなにも貴校に入学したいのだとアピールした。

なんとか、無事に面接を終えることができた。

- - あれは、試験終了後だった。

雨は全く止まず、むしろ強くなっていた。私は緊張がとけたせいかトイレに行きたくなってしまった。もちろん、行かないという選択肢はない。すぐに戻れると思って、荷物はそのまま控え室に置きっぱなしだった。

だが、試験後で私と同じ理由な子が多かったのか、トイレは混んでいた。男子ならば、並んでいてもすぐに終わり、時間はかからないのだが、残念なことに、私は女子なのだ。

そして、控え室に戻った時、それに気づいたのだった。

――傘がない。

私は焦った。確かに傘は荷物の隣に置いたはず。水色の、ちょっと高い頑丈な傘だ。お気に入りのそれがなくなったことよりも、雨に濡れて帰らなければならないのかと思った。

なんで、こんな日に限って、大切な日に限って私の運は悪いのだ。事務室に行き、傘がなくなったので、借してもらえないか頼みに行った。

しかし、傘を借りることはできなかった。

私はどうしようかと思いながら、昇降口に突っ立っていた。家に電話をしようかと思ったが、両親とも働きに出ていて誰もいない。そして、友達も誰もここを受けていない。

最後の手段、知らない子に図々しくも駅まで傘に入れてもらおうか考え、辺りを見渡すけど、昇降口には女子は私以外誰もいなかった。まさに、八方塞がりだった。

――だからだろうか、彼に声をかけられたのをこの上なく嬉しく思ったのは。

「どうしたんですか？」

自分に声を掛けられたとは思わず、何にも反応はしなかった。

「あの、傘もなく何かあったんですか？」

傘がないということで、彼が話しかけているのは私だと理解でき

た。

当然のごとく知らない人だった。

「えっと……傘はね、トイレに行っている間に盗まれちゃったんだ」

私は正直に話した。彼に話しても何が変わるわけでもないのだから、雨足が弱まるまでのちょっとした暇つぶしのつもりだった。

もちろん、直ぐに止むことなんてないとわかっていたけれど。それでも、気休め程度にはなるかなとそんな理由だ。

しかし、私の考えは良い意味で裏切られることになる。

「じゃあ、この傘使いませんか？」

彼が差し出したのは黒の長傘。

「……え？」

意味がよくわからずに、私は混乱してしまった。

「あ、自分の傘はもちろんありますよ。折りたたみの常備してますから。だから、コレ、使ってください。黒ってことは我慢してくれと嬉しいですよ」

彼は朗らかに笑って言う。私は私に向けてくる笑顔で彼のようなものを今まで見たことはなかった。

大体がからかいを含んだイヤな笑顔だったから。

だから、彼の嫌みのない、悪意のない笑顔を見た瞬間に私は力が抜けてしまったのだ。

「え、あつ、あの……」

暇つぶしなんて考えることはもうできなくて。彼に対してどう返事をしたらいいのかを必死に考え始めていた。もしかしたら、いや、もしかしなくとも、入学試験の時よりも、面接の時よりも私は緊張している。

「安売りの時に買った安物なんで、全然全くこれっぽっちも気にしないでください。あ、男の傘なんて使うのが嫌だったら、濡れずに帰ってから即捨てちゃってください。だから、今は我慢してくれれば嬉しいです。我慢してください」

「あっあのっ!!」

「何ですか？」

彼に話しかけようとするものの、私の口は金魚のように動くだけで、音を発することができない。

「ゆっくり、ゆっくりでいいですよ」

「が、我慢とかじゃなくて……、何で、何で話しかけたん、ですか……？」

「話しかけて欲しそうな顔してたから」

――思考が止まる。

「ふえ？」

口からでたのは力の抜けた変な音で。

「帰ろうとしたら、悲しそうな顔して、話しかけて欲しそうな可愛い女の子がいたんです。話しかけてみたいと思うのが普通じゃないですか」

あ、誰もがみんな実際に話しかけるといふのは別としてですよ？と、彼は小さく付け足した。

- - ああ、何だろ、色々考えるのが馬鹿らしく思えてきた。

「……ふふっ、面白いね、面白いよっ。可愛いなんて言われたの初めてだよ！ しかも初対面っ！！」

私は純粹に楽しんでた。何も気にすることなく笑ったのは何年ぶりだろう。

しかも、可愛いだって？ 面白いよ。ほんと愉快だ。私に可愛いなんて言う人はほとんどいなかった。いや、全くなかっただ。

何故なら、私は身長が高い。170センチに届いてしまっているのだ。そうになると、ほとんどの男子中学生より大きくなってしまふだ。女子のことは言うまでもない。

だから、今まで、身体的特徴で何か誉められるとしても、それは「カッコいいね」「綺麗だね」とかそんなものだった。

それを彼は何と言った？ 「可愛い」だ。これは愉快だ、とても愉快だ。

「ふふ、ふふふっ」

今日が雨だということを忘れ、傘を忘れたこと忘れ、私は笑っていた。何も考えず、箸が転がった程度で笑う周りの女の子のように、

無邪気に、バカみたいに。

「もうっ、笑い過ぎて……お腹、痛いっ!!」

「それは良かった。あ、楽しんでるとこで悪いけども、そろそろ帰らないと電車に乗り遅れる……。じゃあ、4月に会いましょうっ！
！あ、第一志望がここだったらね!!」

始まりが突然ならば、別れもやっぱり唐突で、

「あっ、ちよっ……」

私の引き止めを聞くこともせず、彼は帰ってしまった。

- - 黒の長傘をしっかりと私に持たせて。

「駅まで歩きながら話すってことは思いつかなかったのかな……？」

私は彼の後ろ姿に眩き、傘をさしてゆっくりと駅まで歩くことにした。

- - - -

これが、私が彼との出逢いについてだ。

本来なら、彼から目を離せなくなっただきっかけまで語った方が言
いのだが、残念ながら、そろそろ部活が始まってしまう。

だから、何故、私が彼から目を離すことができなくなったのかは、
また次の機会にしよう。

幕間 - 誰かの場合？（後書き）

感想、批評などがありましたら、是非よろしくお願いしますね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4665s/>

ばくわたっ！

2011年10月5日19時23分発行